民俗学研究所ニュース
No.146
October, 2024

・巻頭言……1
・研究所活動報告……2
・豆手帖㊺ ……3
・催し物案内等 ……4

トランスする民藝
―シアスター・ゲイツの「アフロ民藝」

文芸学部長 木下 誠

2024年の夏休み日記から、民俗学研究所と少しは関係するであろう断片の継ぎ接ぎを。

この夏、愛知県常滑市のやきもの工房を見に行ってきた。きっかけは、六本木の森美術館で9月1日まで開催されていた「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」である。1973年シカゴ生まれのブラック・アーティスト、シアスター・ゲイツは、アメリカの公民権運動のスローガン「ブラック・イズ・ビューティフル」と日本の「民藝運動」を融合させた独自の美学を「アフロ民藝」と呼び、その実験的な試みを展開している。彼は彫刻と陶芸作品を中心に、メディアやジャンルを横断しながら建築、都市計画、音楽、パフォーマンス、ファッション、デザインなどの分野で活躍しているが、常滑市で陶芸を学ぶために2004年に初来日以来、日本文化の影響を受けてきたという（展覧会チラシ裏面の紹介文より）。

柳宗悦は無名の職人が作る日用雑器の美に魅了されて1920年代半ばに民藝(the art of people)運動を創始し、柳の没後もその理念や運動は世界各地へと展開していった。そうした広がりとゲイツの「アフロ民藝」はどこが違うのか、この夏休み自由研究の課題を携えながら、名古屋駅から電車で30分ほど揺られ、名鉄常滑駅から徒歩15分ほどのところの小高い丘に点在する工房を歩いてまわったのである。

今春に世田谷美術館で開催された「民藝MINGEI：美は暮らしのなかにある」は、当然のことながら日本の地方のローカリティを強調した展示構成だった。そうした民藝のもつローカリズムの意義を大切にしつつ、しかし閉鎖しがちな個々のローカリティを一気にトランスさせ、再位置化してつなぎ直し、「民藝」という概念そのものを再定義しようとしたのが「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」だった。

森美術館の展覧会には、ロンドンのV&A博物館からのゲスト菊池裕子氏によるトーク「シアスター・ゲイツの『アフロ民藝』が促す工芸による脱植民とトランスナショナリズム」の日に合わせて行ってきた。半年近く「積読」状態だった論集『この国（近代日本）の芸術――〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』（月曜社）に前期期末試験期間中にやっと手を伸ばすことができて、そこに収載されていた菊池氏の「「工芸」から「この国」の「日本美術史」を脱帝国主義化する――ジェンダー、伝統、サステナビリティ」のクリティカルと言うしかない、美と政治の危険な関係性をめぐる論考に刺激を受けていたからである。菊池氏のトーク後の質疑応答には、来日中のゲイツ本人がサプライズで登場して議論に参加し、頭の中はアカデミックな刺激でいっぱいになりながらもミーハーな私の気分を盛り上げてくれた。

酷暑の常滑やきもの散歩道

「アフロ民藝」のトランスする〈アフロ〉は、私の研究分野からの関心では文化批評家ポール・ギルロイが「ブラック・アトランティック」や「ディアスポラ美学」として跡づけてくれた異種混淆性の変奏であり、また私の音楽的趣向からは、アヴァンギャルド・ジャズのアート・アンサンブル・オヴ・シカゴやPファンクらのグルーヴが日々伝えてくれる混沌とした感覚である。こうした時空間をトランスする〈アフロ〉の系譜については、イターシャ・L・ウォマックが『アフロフューチャリズム――ブラック・カルチャーと未来の想像力』（フィルムアート社）でみごとにまとめている。あとは菊池氏の英語著書を読んだら、と、そんなこんなで過ぎていった、これまでになく短い私の夏休みは（嗚呼、9月2日から会議が始まるなんて）、偉大なるアフロフューチャリスト、サン・ラのプレイリストからApple Musicがシャッフルして流してくれる曲「スペース・イズ・ザ・プレイス」の猥雑で豊穣で執拗に反復する残響音とともに、さしてトランスする機会もなく、夏休み自由研究も未完成のまま、終わりを迎えたのである。（運営委員）

研究所活動報告

◆所員研究例会要旨　令和６年７月 11 日（木）開催

「心霊スポットからなにが問えるか ―場所と記憶の民俗学―」

及川祥平

本発表では拙著『心霊スポット考―現代における怪異譚の実態』（アーツアンドクラフツ、2023年）で試行した議論をふまえ、未発表の事例を補いつつ、場所と記憶をめぐる民俗学的研究の素材として心霊スポットを位置づけることで可視的になる課題を検討した。

心霊スポットは「空間」が言説を通して編成された「場所」であり、制度化されていない（非公式の／問題ぶくみの）探訪行為を導く。その意味で、ヴァナキュラーな空間実践の様態を解き明かす素材として興味のつきないものである。拙著は、いわば、空間・場所のヴァナキュラリティの生成や変容を解き明かすものであったといえる。他方、心霊スポットは陰惨な事件の現場であるという過去の情報（記憶）によって意味づけられる。非公式に語られる、虚実ないまぜのそれらの過去の情報は、しばしば事実の提示によって打ち消される。このような記憶をめぐる攻防の焦点としても、心霊スポットは議論することができる。

また、拙著でも述べたように、心霊スポット探訪は迷惑行為であり、心霊スポットを論じるうえでは人びとの倫理観をも対象とせざるを得ないが、各種のトラブルから、心霊スポットおよびそれをめぐる情報の社会的次元における取り扱いも変質してきた。いわば、空間のヴァナキュラリティが制圧されていく過程をそこに見出すこともできる。俗的な次元における創造性が公共性との間に引き起こす軋轢の推移として注目することができるといえよう。　（所員）

「生理休暇の誕生とその終焉のゆくえ」

田口亜紗

生理休暇は診断書無しに労働者が休暇を請求できる権利として労働基準法に規定されている。男女平等原則に反するとして内外から強い批判を受けながらも、劣悪な労働環境における母性保護という観点から敗戦直後に世界で初めて制度化した。以降、日本の労働環境は改善し生理用品や鎮痛剤が普及、男女雇用機会均等法の影響もあり取得率の低下は加速し、その終焉は間近にみえた。ところが近年、海外では月経時の休暇制度の導入が相次ぎ、国内でも生徒への休暇措置や名称変更が進むなど、そのゆくえは今日のグローバルな価値を反映させて新たな局面を迎えている。

月経は 21 世紀に国際課題となった。MDGs や SDGs で月経は開発目標のひとつとなり、WHO やユニセフは月経衛生をめぐる具体的な議論を進めた。コロナ禍には月経に付随する不利益を多くの女性が経験していることが先進国でも顕在化し、「生理の貧困」が国や性別、世代を超えて人々の関心事になった。海外では生理用品の軽減税率化や税撤廃、国内でも自治体や学校による生理用品の無償配布が実施され、文科省が授業や入試の月経による欠席への措置を通知するなどした。生理休暇には個人に秘匿された月経情報を教師や上司に公言する際に伴う羞恥の課題もあったが、近年は複数の企業が申請者の性別や休暇目的を拡げた名称変更に乗り出している。

「生理休暇＝母性保護」というロジックは今や時代錯誤となり、戦前から学校や企業で育まれた「皆勤」文化も崩れつつある。今後、月経に関連して休むことへの社会的承認の論拠は、女性特有の生殖能力や脆弱性の保護にではなく、多様な身体への配慮に求められてゆくだろう。一方、昨今の潮流を後押しする新たな価値のなかには、無駄な出席や出勤を嫌う効率化や成果主義、社会資源を駆使した個人による解決が期待される個人化の兆候も見え隠れする。それらの功罪にも留意しつつ生理休暇終焉のゆくえを引き続き追跡したい。　（研究員）

豆手帖

オクシモロン
―真相・真価発見の鍵―

本学名誉教授
筑波大学名誉教授　**森田　孟**

今や世界百か国以上に２億人余のファンが居ると言われる数字パズル「数独」は、“SUDOKU”なる単語が *OED* にも収録されている。その名付け親でパズル製作とパズル誌出版社「ニコリ」を創設して世界で「数独のゴッドファーザー」と親しまれる鍜治真起氏（1951-2021）は、日本以外では「数独」を商標登録しなかった。そのために大儲けし損なったことを米紙 *New York Times* は、経済面トップ記事で、“Brilliant Mistake”と評したのだった。

「輝かしい失敗」とは、「数独」で目覚ましい成功を収めながら利益の面では失敗したと見られた鍜治氏を指すには誠に言い得て絶妙な表現で、これ程、同氏にとって名誉な褒辞はなかった筈だ。

2021年の東京国際映画祭企画コンテストで優勝した中村真夕監督の映画作品名は、「親密な他人」（英題 Intimate Stranger）であったが、これまたこの傑出した監督にして可能な題名であり、作品だった。世には、赤の見知らぬ疎遠な他人なのに、親密なとしか言いようのない不思議な人物が確かにいる。「親密な他人」と言われて成程それが真実だと初めて納得させられる、そういう状態を鮮明に指摘した、これは見事な表現であった。

「輝かしい失敗」（Brilliant Mistake）や「親密な他人」（Intimate Stranger）のような、一見矛盾とみえる語の組み合わせながら、それ以外では表出できない真理・真相を鋭く衝いた警句表現は、「オクシモロン」（撞着語法）と呼ばれる。本来はギリシャ語の鋭いの意の（オクサス）と、鈍いの意の（モロス）の合成語彙で、「オクシモロン」（oxymoron）なる語そのものが撞着語であるのが素晴らしい。英語としてのこの語の初出は、1640年（*OED*）である。

そうだ、先刻何気なく「矛盾云々」と使ったこの語、「矛盾」が、『韓非子』を出典とする物売り人の矛盾を衝く東洋版の「オクシモロン」であった。

自分が売るのは、どのような武器でも突き破れない盾と、如何なる物でも突き通せる鋭い矛だと自慢する商人が、ではその矛でその盾を突いたら？と問われて絶句した故事に拠る。「矛盾」という語自体が矛盾になっているのが鮮やかだ。

シェイクスピアもこの語法を愛用したが、特に『ロミオとジュリエット』（I.i.182-88）で、ロミオに７行の科白で「口論する恋だ、愛する憎悪だ…」とそれを12語句も集中して使わせ、彼の恋の種々矛盾した状態を表明させたことは余りにも名高い。

私が折節想起する鮮烈な「オクシモロン」は、フランスの詩人ランボー（Arthur Rimbaud, 1854-91）が、友人ポール・ドゥメニーに宛てた手紙（1871年5月15日付）の中で下した詩人の定義の中に出てくる「理づめの錯乱」（raisonné dérèglement）である。―「詩人」は五感すべてをあげての長らくの途方もない理づめの錯乱によって自らを見者にするのです。（Le Poète se fait *voyant* par un long, immense et raisonné *dérèglement de tous les sens.*）「見者」（ヴォワイアン）になるのが真物の詩人だがそれには長期に及ぶ途方もない「理づめの錯乱」を経なければならないなら、ランボーのような詩人はめったに現れないであろう。

今年は、カフカ（Franz Kafka, 1883-1924）の没後百年になる。彼の代表作である未刊の長篇小説『城』（1926）の測量師Kにとっては、目指しながらも到り着けないあの城は、＜見えるのに見えず＞＜見えないのに見える＞相手であった。カフカの世界の所謂「不条理」が永遠の魅力に富むのは、それが「条理の不条理」であり「不条理の条理」という深遠な「オクシモロン」の状態だからではなかったろうか。単なる「不条理」ではなかったのだ。

我々の日常世界でも、「有難迷惑」「卑下自慢」「賢い愚か者」「残酷な親切」、はては「急がば廻れ」など、見事な「オクシモロン」がさり気無く発見を示し、真相を剔出しているが、「愛の鞭」は濫用、いや 誤用が多くなって無知状態で、相手に伝わらなくなっているので、これは死語になるべきだろう。とにかく 鞭＝暴力は、全く駄目なのだから。

1918年～19年に世界中で大流行した「スペイン風邪」は、日本でも約2300万人が感染し、約38～45万人が死亡した大災厄だった。この流行についての柳田國男の公に発表した文章や発言が、私には見当らない。しかし、柳田翁のこの無言・沈黙という不思議な事態も、実は今更柳田國男の附和雷同めいた発言は全く不要だとする「雄弁な沈黙」であり、「饒舌な無言」だったのだと思い当るに到って、安堵した。「スペイン風邪」への柳田國男の対処は、深慮の「オクシモロン」だったのである。

本稿が、我田引水の謗りを免れますように！

民俗学研究所特別展

木とくらす

―こけしがおしえてくれること―

会期：11月2・3日（文化祭）、5日～11月30日　※日祝・11/4は休館
時間：午前10時～午後4時＜土曜日は正午まで＞
会場：民俗学研究所展示室　　（大学4号館3階）

※日程が変更になる場合があります。ウェブサイト（https://www.seijo.ac.jp/research/folklore/）をご確認ください。
電　話：03-3482-9098　（平日午前9時～午後4時30分、土曜午前9時～正午）
メール：minken@seijo.ac.jp

民俗学研究所では「木とくらす―こけしがおしえてくれること―」と題して特別展を開催いたします。

研究所に収蔵されている約3900点の郷土玩具の中から、東北地方で生まれた木地玩具人形であるこけしを題材に、日本の森林の多様性とその変容について紹介いたします。

天然木をろくろで挽いて製作した簡素なフォルムと、手描きの顔や胴体の模様が一体ごとの個性を生み出す造形の背景には、製作者である木地師たちの木と共に生きるくらしがありました。故臼井毅名誉教授寄贈の伝統こけしを中心に、こけしの用材と製作工程や創作こけし、日本各地の木地玩具も展示予定です。

皆さまのご来観を心よりお待ちいたしております。

編集後記

民研ニュース146号をお送りします。巻頭言には木下誠文学部長から「トランスする民藝 ―シアスター・ゲイツの「アフロ民藝」」との題名でご寄稿をいただきました。「民芸」のありかたについて、国外の動向を含めて紹介をいただき、示唆に富んだ内容になっています。

民俗学研究所では毎年7月に所員研究例会を開催しています。今回は及川祥平所員から「心霊スポットからなにが問えるか ―場所と記憶の民俗学―」、田口亜紗研究員から「生理休暇の誕生とその終焉のゆくえ」との題で報告をいただき、その要旨を掲載しました。民研の多様な活動がおわかりいただけるかと思います。豆手帖には森田孟名誉教授から「オクシモロン―真相・真価発見の鍵―」との題でご寄稿をいただきました。

今年度は秋の展示として「木とくらす―こけしがおしえてくれること―」を企画しております。興味がある方はぜご来場下さい。最後にご寄稿いただいた皆さまに感謝の意を表したいと思います。

民俗学研究所ニュース　No.146
令和6年10月15日発行
編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事　小澤　正人
〒157-8511　東京都世田谷区成城6-1-20
TEL：03-3482-9097・9098　FAX：03-3482-7763
mail：minken@seijo.ac.jp